



ビオトープ・ニュース069

発行日 2014/09/07

発行：日本ビオトープ管理士会 徳島支部
 事務局：徳島市山城町東傍示 5-281 新弘測量設計株式会社
 事務局長：東條芳顕 TEL：088-622-5688

■ビオトープ・サロン ソーラーパブルがエコロジカルネットワークを脅かす 第3弾

前号068では、第3弾が無いことを祈りつつの報告でしたが、早くも第3弾となってしまいました。(編集部)

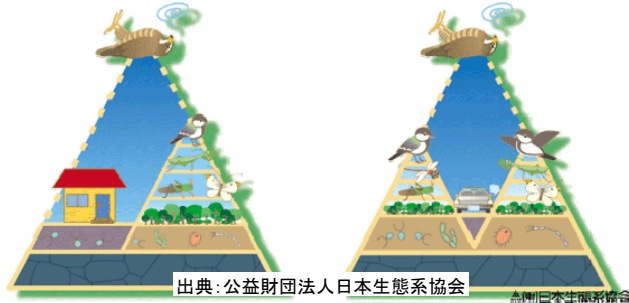
【グリーンインフラの推進が提唱される中で折り合いは如何に！？】

記者：樫本幸実（会員）

公共施設敷地内で長年未利用地として放置され、草地在り成長していましたが、ソーラーパネルの基礎設置と思われる工事が始まったようです。(去る7月18日確認)

生態系の底辺に位置する生産者(植物)や二次消費者(植食昆虫)の生育・生息する場所が減少の一途です。底辺の生物が減少すれば高次消費者(猛禽類等)も減るのが必然で、生態系(自然の仕組み)が壊れていきます。

私たち人類が住めなくなる前に、これ以上壊すことなく、修復のための土地利用に心がけるべき時が来ているはずなのですが・・・[茹でガエル] になりませんように！

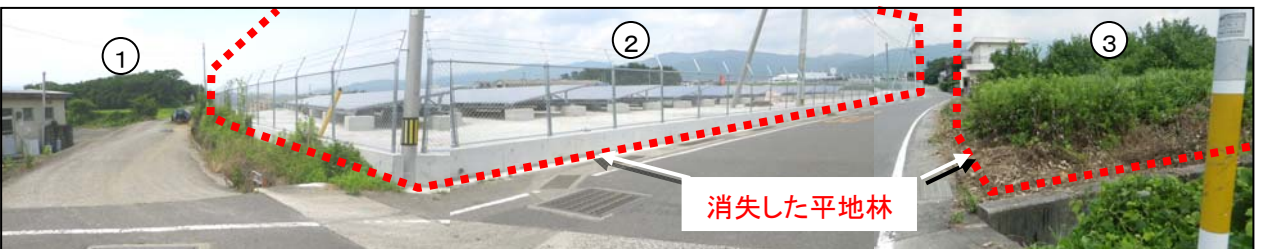


未利用地の管理作業で草地在り維持されていたが、ついにソーラーパネルで生育地が縮小に向かう。

【ニュース064のその後・・・やはりソーラーだった！】

この周辺は、まとまりのある平地林が残り、かつては野鳥のねぐらやコロニーとして、また、子どもたちの身近な自然とのふれあい場ともなっていました。(詳しくはニュース064参照)

この度の開発により、大半が消失し、奥に見える3箇所(①～③)に点在してわずかに残存するに至っています。



発電施設用地の大半は開発跡地で、外周や東西の平地林の皆伐は日照確保のためか？増設用地か？

■ビオトープ・カルテ みんなで集めるビオトープ情報 ～ビオトープ・ニュース065の続編～

記者：樫本幸実（会員）

【葉がエビネに似た小型の野性ラン生育地】

ビオトープ・タイプ：ため池の湖畔林

規模：20～30㎡に数株ずつ4箇所に点在

環境特性：丘陵地のため池湖岸斜面地の雑木林

周辺土地利用：ため池と里山(コナラ混在の照葉樹林)

撮影年月日：2014年7月6日

場所：非公開

数年前に偶然見かけた見慣れない野草、ふと思い出し花が咲いていないかと再び訪ねました。しかし、残念ながらつぼみのまま萎縮したような花柄のみで花は確認できず。初回4月27日から7月6日まで、計4回出向きましたが、開花のタイミングは逸してしまいました。来年は6月中旬が狙い。花柄と葉は【コクラン (RDB 非掲載)】に似ている。



撮影：2014/06/29

撮影：2014/07/06

■ビオトープ・カルテ みんなで集めるビオトープ情報 忘れ去られる外来生物

記者：榎本幸実（会員）

【未だ衰えを見せないオオキンケイギク】



ビオトープ・タイプ：草地
 規模：約900㎡（L300m W3m）
 環境特性：桜並木が整備された遊歩道の路傍（河川管理用地）
 周辺土地利用：県道／徳島市浄水場
 撮影年月日：2014年5月29日
 場所：石井町藍畑字高畑 第十 第十さくらづつみ公園

第十さくらづつみ公園では、毎年オオキンケイギクが咲きますが、緑地整備によって桜と共に植栽(播種)されたと推察します。

特定外来生物法施行前の平成元年～3年度にかけて施工された緑地で、チガヤと競合しつつも、未だオオキンケイギクは健在で、咲き誇っています。また、近傍の吉野川本堤にも数株が広範囲にわたって拡散していましたが、草刈りのせいか、国交省の何らかの対策か？…抑制されているようです。

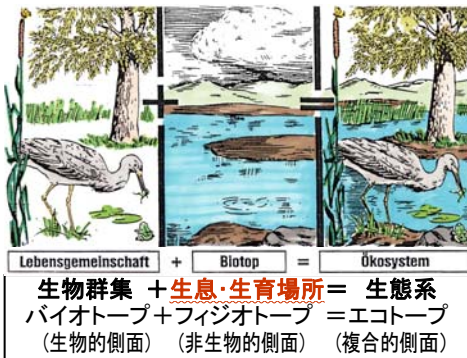
オオキンケイギクは、かつて、ワイルド・フラワーとして他の草花と共に各地の法面や公園緑地に播種されました。しかし、特定外来生物に指定された折に話題になり、その当時は、徳島でも某公園の法面が新聞で大きく取り上げられ、管理者によって駆除、処分されました。

近年、希少種に並んで外来種が話題になることも少なくありませんが、被害が顕在化しないと対策が動かない現状です。でも、一部では改善の兆候も。



■ビオトープ・ナビ 雑学コーナー ～未だ誤解が多いビオトープ～

ビオトープは「生態的秩序に沿った土地利用計画のための空間単位」として、ドイツで定義された造語。（編集部）



【ビオトープとは生物群集が生息・生育できる空間単位の区分】

ビオトープは、フィジオトープを生物群集が生息・生育する場所として捉えた空間単位と解することができます。以下、関連用語を参考まで。

- ・ハビタット：特定の個体または個体群の生息に着目した空間単位
 - ・ビオトープ：生物群集に着目した均質でまとまりある場所の空間単位
 - ・バイオトープ：フィトトープ(植物)とズートープ(動物)に分けられる
 - ・フィジオトープ(ゲオトープ)：地質・地形や気候に着目した空間単位
 - ・エコトープ：バイオトープとフィジオトープを複合した空間単位
 - ・エコシステム(生態系)：一つの単位として成立する生態的繋がり
 - ・ランドスケープ：複数のエコトープや人間活動をも包含する空間単位
- (図はビオトープセミナー(主催：日本生態系協会)資料より転載、用語は各種文献より要約。)

■ビオトープ・セミナー 資格試験に挑戦して基礎知識を修得しよう！

ビオトープ管理士資格試験過去問題 出展：(財)日本生態系協会主催「ビオトープ管理士セミナー」のテキストより無断転載禁止：本紙は公益財団法人日本生態系協会の許可を得て転載しています。（編集部）

【施工部門1級の記述問題：解説は次号で紹介】

問69：市街地を流れる水路を改修して、水辺植物や河畔の樹木が生育する自然に近い小川を再生しました。自然面、社会面で期待される機能、管理上の課題を400字以内で述べなさい。

■前号068の解説

山地に近い農村集落内を流れる河川などで、河道を掘削して河道断面を拡幅する工事を行う場合などは、底生魚が多く生息することから、これらを保全するための多自然川づくりを行う。対象となる底生魚、その生息地保全のための多自然川づくりを行う場合の主な留意として、次項が挙げられます。

主な底生魚：カジカ・ヨシノボリ類・アカザ・ドンコなど。

生態的理解：生息場は河床石の裏面や間隙、産卵場は多くが河床石の表面、主な餌である水生昆虫の幼虫の生息場は河床石の表面、つまり、生息場や産卵場及び餌生物の生息場となっている河床石の保全が重要。

物理的環境：底生魚の産卵場となる河床石は少し埋まった状態の載石、水生昆虫の幼虫が多く生息するのは埋まった状態にない浮石で、載石は淵から流れ出る平瀬に、浮石は淵に流れ込む早瀬に多く存在、つまり、平瀬・早瀬・淵がセットとなった河川形態を保全・再生することが重要。

※2級はどなたでも受験でき、四国の受験会場は「徳島大学工学部」です。自然環境の保全に関わる方には、是非とも取得していただきたい資格です。詳しくは、<http://www.ecosys.or.jp/>（公益財団法人 日本生態系協会HP）

■編集後記

ビオトープに関するお役立ち情報のもとより、皆様の生活や活動やお仕事等、日常を通じて見たり感じたりしたこと、身近な自然の春夏秋冬や喜怒哀楽のご寄稿をお待ちしております。ふるってご参加ください！ 編集部 [E-mail: kanv@nifty.com URL: <http://biotopetokushima.yu-yake.com>]